The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代日本社会における自己愛とジェンダー : テキスト分析と実証研究の統合の試み
Author(s)	松並, 知子
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47170
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【３】

氏　　名	松（まつ）　並（なみ）　知（とも）　子（こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２０６１１　号
学位授与年月日	平成 18 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**現代日本社会における自己愛とジェンダーーテキスト分析と実証研究の統合の試みー**
論文審査委員	（主査） 教　授　ジェリーヨコタ （副査） 教　授　仙葉　　豊　　助教授　津田　保夫

論　文　内　容　の　要　旨

英語の narcissism と self-love はどちらも日本語では「自己愛」と訳されている。そのため、「自己愛」という言葉は、肯定的な意味にも否定的な意味にも使われてきた。本研究では、不健康・不適応的な自己愛を「ナルシシズム」、健康的・適応的な自己愛を「セルフ・ラブ」と定義し、それぞれの概念を整理し、それらにまつわる現象を考察すること、さらに、ナルシシズムとセルフ・ラブの関係を検討することが目的であった。

自己愛人格障害には、よく知られている尊大で自己顕示的な「誇大タイプ」だけでなく、他者を理想化、賞賛し、その他者の一部のように感じられる間だけ自分に価値があるように思えるという「依存タイプ」（Kohut & Wolf、1978）もあるといわれている。また、「依存タイプ」には女性が多く、その理由としては、母親との密着関係や女性性が関係しているのではないかと考察されている（中西ら、1987、1992 ; Philipson、1985 ; Reich、1953）。現代の日本では未だ性別役割分担が強固であるため、経済力による支配－服従関係も起こりやすく（伊東、2000）、男性が誇大的に、女性が依存的になりやすいとも考えられる。実証研究においても、自己愛の表れ方は男女で異なり、男性は誇大的、権力的になる傾向に、女性は依存的、執着的になる傾向がある（Carroll、1989）と報告されている。本研究では「依存タイプ」にも焦点を当て、特にジェンダーとの関連を中心に検討することも目的とした。

研究方法については、従来の心理学では、心理尺度などを用いた量的な研究が主要な手法であったが、近年、このような実証的な方法では、人々の実感や日常に則した研究はできないのではないかという批判がされるようになり、フィールドワークやテキスト分析などの質的な研究、あるいは、量的研究と質的研究を統合した「マルチメソッド（ミックス・メソッド、トライアンギュレーションともいう）」などの新しい手法が注目されるようになっている。そこで、本研究では、まずテキスト分析を行うことにより、自己愛とジェンダーにまつわる現象を浮き彫りにし仮説を立て、次に、質問紙調査を用いた実証研究を実施することにより、それらの仮説を検討した。

3.1.では、多くの読者を獲得し話題になっている漫画『だめんず・うぉ～か～』と、その作者であり、今や若い女性たちの恋愛指南役ともみなされている倉田真由美が発信している言説について、テキスト分析を行った。テキスト分析の結果、倉田真由美には「女らしさ」や「フツー」へのこだわり、女としての成功者の代名詞ともいうべき「シロガネーゼ」への憎悪が特徴として見られ、「自分らしさ」と「理想的な女性像」との葛藤に苦しむ様が見られた。言い換えれば、彼女の葛藤は、社会的自己実現と性的自己実現のジレンマ、社会的成功と「女としての幸せ」との間

の矛盾であるともいえる。倉田が多くの読者に支持されていることを考えれば、彼女の葛藤に共感する女性は多いと思われる。『だめんず・うぉ～か～』に登場する女性たち、「だめんず・うぉ～か～」には、伝統的、形式的な「男らしさ・女らしさ」へのこだわり、自己評価の低さなどの特徴が共通して見られた。彼女たちには、セルフ・ラブが欠如しているために、「だめんず」を自己同一視し、依存し依存されることで空虚な自己を埋め合わせようとする傾向が見られ、「依存タイプ」との類似点が多いと考えられた。一方、「だめんず」には、虚言癖、暴力的、責任転嫁、共感性の欠如、プライドの高さなど、アメリカ精神医学会が定めた自己愛人格障害の診断基準に該当するような特徴が多く見られ、「誇大タイプ」に該当すると考えられる。また、「誇大タイプ」の男性には「男らしさ」へのこだわりが、「依存タイプ」の女性には「女らしさ」へのこだわりが見られ、女性が「依存タイプ」になる背景には「自分らしさ」と「社会から求められる女性らしさ」の葛藤があることが推察された。

3.2.では、作家中村うさぎのエッセイを対象にテキスト分析を行った。中村は、買い物依存症、ホストクラブ通い、美容整形と、次々と「異常な」体験をし、それを著書や雑誌などで発表するという、いわゆる破滅型の作家であるが、著書も多くテレビや雑誌への露出も多いことから、社会への影響力は大きいといえる。彼女は、そのような依存症的行動の裏には「成功した自己像」や「愛される自分像」の追求があったと自己分析している。そういう「すばらしい自己像」を獲得したいと熱望する裏には、それをアピールすることにより、他者から高い評価を得たい愛されたいというナルシシズムが潜んでおり、そこにはセルフ・ラブの欠如が関連していることが読み取れる。中村の言説に見る、「他者からうらやましがられるような理想的な自己像」への異常なこだわりと強烈な自己嫌悪、自己否定には、ナルシシストの苦悩が凝縮されているといえよう。また、彼女の言説には、セルフ・ラブが欠如することが誇大自己のアピール、つまり、ナルシシズムに関連することが明確に表れていた。

4.3.では、自己愛尺度（NPI、PA、PGD）と基本的信頼感尺度、自尊感情尺度の関連を調査することにより、ナルシシズムとセルフ・ラブの関連を検討した。その結果、NPI の下位尺度である「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」と基本的信頼感尺度はセルフ・ラブに、NPI の下位尺度の１つである「注目・賞賛願望」と PGD はナルシシズムに相当することが示唆された。また、セルフ・ラブとナルシシズムは逆相関の関係にあり、セルフ・ラブの欠如がナルシシズムの強さと関連していることが示された。中村うさぎの言説では、「自分で自分を愛せないこと」「自信のなさ」が誇大的・理想的な自己像のアピールと強く関連していることが浮き彫りになっていた。また、倉田真由美の言説でも、「理想的な女性像」を体現できない自分を受容できないことが「依存タイプ」になることに関連していたが、この調査の結果は、それらのテキスト分析の結果を裏付けるものとなった。

4.4.では、自己愛と対人関係の関連を検討した。まず、恋人の選択基準と NPI との関連を検討した結果、相手がどんな人かということを重視せず、相手との関係をより重視する人ほどナルシシズムが強いことが示唆された。『だめんず・うぉ～か～』に登場する女性たちは、相手の男性がいわゆる「だめんず」で客観的には「悪い」パーソナリティを持った人であったとしても、自分を必要としてくれている、自分を愛してくれているという基準で恋人を選んでいるようであった。本研究の結果に見るナルシシストの行動と「だめんず・うぉ～か～」たちの行動は一致しているといえよう。

他者からの評価については、ナルシシズムが強い人は、現在自分がどのように評価されているかに関わりなく、今以上により高い評価を求める傾向や、自分について考える際、他者との関係や他者からの評価を想起する傾向が見られた。中村うさぎには、人気作家になったり美容整形をしてより美しくなったりしても、現在の評価に満足することなく、より高い評価を求め続ける傾向が顕著に見られた。また、彼女が持っている自己像は、自分が思う「どんな人か」ということではなく、常に「世間がどう思うか」「他者からどう評価されているか」というものに基づいているようであった。以上のような調査結果は、中村の言説に見るナルシシストの対人関係の特徴に合致するものであった。

4.5.では、性役割と自己愛の関連を検討した。自己愛尺度の得点については、概して有意な性差は見られなかったが、性役割に関しては、男性は男性性を、女性は女性性を重視する傾向が見られた。自己愛は、従来、男性性との関連が強いと言われてきたが、本研究の結果では、男性についても、男性性、女性性の両方を併せ持つことと高いセルフ・ラブとの関連が示唆された。また、理想的な女性性を重視することや、それを実現できないことが、依存的なナルシシズムと関連していることが示された。「だめんず・うぉ～か～」たちや倉田真由美には、「理想的な女性像」に非常にこだわり、自らがそれを体現できないことに葛藤している様が見られ、それがセルフ・ラブの欠如や依存的な

ナルシシズムと関連していることが推察された。この調査の結果からは、多くの女性たちが、倉田や「だめんず・うぉ～か～」と同様の心性を持っていることが示唆されたといえよう。

4.6.では、自己愛と対人関係の関連について性差を検討した。その結果、男性は、概して他者との距離を保ち自立しようとするが、ナルシシズムが強い男性は、他者に影響を受けやすく依存しやすい傾向が見られ、自己を「あたたかい人」とポジティブに認知していることが示唆された。一方、女性は、他者との距離が近く他者と一体感を築こうとする傾向があり、男性よりも共感性や依存性が強いことが示されたが、ナルシシズムが強い女性は、より他者から影響を受けやすく、受動的に他者に依存する「しがみつき」傾向が見られた。以上のようなナルシシズムの表れ方の性差は、『だめんず・うぉ～か～』に見る「誇大型」の男性と「依存型」の女性の特徴と一致しているといえる。

4.7.では、自己愛と親に対する気持ちの関連、および、その性差を検討した。その結果、男女とも、親に甘えた頻度が高い、ほめられた頻度が高いと認知している人ほど、自分への好意度が高い傾向が見られた。しかし、父母への気持ちと自己愛の関連の仕方には性差が見られ、男性の場合は、母に好意的な気持ちを抱いている人ほどナルシシズムが強い一方、父を好意的に見ている人ほどナルシシズムが弱いという傾向が見られた。女性の場合は、母に対して否定的な気持ちを持っている人ほどナルシシズムが強く、父への気持ちと自己愛の関連は見られないという結果が示された。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代日本社会における自己愛とジェンダーの表象およびそれらについての言説を徹底的に解明するために、テキスト分析と実証研究というマルチメソッドを用いたものである。二人の人気作家（倉田真由美と中村うさぎ）のエッセイ・まんが・対談などのテキスト分析に加えて、若者を対象とした質問紙調査を行い、その結果を統合的に考察することにより、ジェンダー意識についての総合的な研究成果を挙げている。

自己愛・ナルシシズム・セルフラブに関する先行研究と臨床的側面から見た自己愛人格障害の分析に用いられる基準をふまえ、筆者はまず伝統的心理学研究法の問題点を指摘し、新しい方法論を提案している。次に、倉田真由美と中村うさぎのテキストを数多く取り上げ、独自に開発したマルチメソッドにより、従来の尺度では測れなかった、二人の作家のジェンダーにまつわる葛藤を解明している。更に、九種類の質問紙による調査結果を細かく分析し、その統計を提示している。自尊感情・基本的信頼感・恋人の基準・賞賛願望・親の教養態度や友人関係についての記述を分析する際、特にジェンダー意識という側面に注目することにより、従来とは異なった総合研究に成功している。

評価される事例として特記に値するところをいくつか具体的に指摘すれば、例えば倉田真由美と中村うさぎの言説と調査被験者の回答を比較することにより、従来のナルシシズムの測定に用いられている尺度の限界を示し、それが文化差およびジェンダー差による死角のためであることを明らかにしたことが挙げられる。または、誇大型ナルシズムと自己愛の欠如や自己愛と親子関係の関連を検証する際に有意な相関が確認されたことも重要であろう。

第四章における統計の提示に難点はあるものの、量的研究と質的研究の統合を試みるという斬新な手法を取り入れた点は評価に値し、優れた研究成果をおさめていると言えよう。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。